

先週の礼拝メッセージ(2023年10月22日) ベン牧師

「声」 ヨハネによる福音書 1:19-23

今日の箇所は、バプテスマのヨハネについて記されているところです。四福音書すべてが、バプテスマのヨハネについて記していますが、バプテスマのヨハネ自身が「私は声だ」と自らを紹介しているのは、ヨハネの福音書のみです。さらに、ヨハネの福音書のみが、イエス様のことを「ことば」として紹介しています。この二つのことがヨハネの福音書に記されているということはとても興味深いことです。

皆さんには私の声が聞こえていますね。たとえば、「おはよう」と私が言い終わった瞬間、私の声は消えますが、言葉は相手に伝わって返事が返ってきます。声は消えるけれど、言葉は残っていくのです。バプテスマのヨハネは常にイエス様を指し示しました。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」(1:29)「この方こそ神の子であると証ししたのである。」(1:34)

彼はイエス様が救い主であることを紹介することが使命でした。そしてその使命が終わりに近づき、彼の弟子たちがイエス様のもとに行き、そのほかヨハネを慕っていた大勢の人々もイエス様へと流れ去って行った時も、彼の弟子たちが、「先生、みんながあの人の方へ行っています。」(3:26)とヨハネに言うと、彼は「あの方は必ず栄え、私は衰える。」(3:30)と答えるのです。

人間的な見方をすれば、何かで用いられていた人が、用いられなくなるというのは寂しいものです。しかし、立場や年齢、状況によって自分自身が現役から引退するときは必ずやってきます。ヨハネは自分は声であって、イエス様という素晴らしいお方を紹介することこそ、使命であるということを理解していました。だからこそ、あなたは何者ですかと聞かれた時、「私は声です」と言うことができたのです。人々に救い主到来を告げ、悔い改めのバプテスマを授け、人々の心が罪を認識するよう整えていくことに全力を尽くしたのです。イエス様という言葉が、人々の心に残るために、その言葉を運んでいく「声」として生きたのです。

主の弟子パウロも、その生涯の終わりに、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通したと告白しました。(Ⅱテモテ 4:7)

ヨハネもパウロも、その人生の終わりにあるのは、自らが衰退していく中で、使命を全うしたという満足感でした。それは、自分が何のために生かされ、自分に与えられた使命は何なのかをはっきりと認識していたからこそです。ですから、使命が終わった時、それは虚しさや寂しさではなく、喜びと感謝となるのです。

すべてのクリスチャンには、主を証しする使命が与えられています。しかしそこには注意すべき点があります。証しは、皆からほめられ、認められることではないということです。イエス様のことを伝えたバプテスマのヨハネは、反対され、投獄され、彼を認めない人々は多くいました。しかし彼は声としてイエス様を伝え続けました。主を証しして、嫌われ、悪口を言われることもあるということです、クリスチャンになる前は、罪を犯しても平気でいたのに、救われて罪を遠ざける姿を、世の人々は侮辱し、不評し、そしると聖書は言っています。(Ⅱコリント 6:8、Ⅰペトロ 4:4)でも、それこそが証しなのです。ヨハネは自分が声であるという自覚があるからこそ、自分の使命によって悪評を受けてもそれを良しとして、忠実に従っていきました。クリスチャンが証しを立てるということは、真実にこの世を歩む中で、不評をかうことも良しとするということなのです。

私たちクリスチャンは、誰のために生きているのでしょうか。世の中の考えでは人間は自分のために生きるというでしょう。しかしクリスチャンは、イエス様のために生きるのです。イエス様が、私のために十字架ですべての罪を負って死んでくださり、私の罪を赦してくださったからこそ、「あの人は素晴らしい」と言われるよりも、「あの人の信じているイエス様は素晴らしい」と言ってもらえる「声」となりたいのです。私たちを通してイエス様の言葉が相手の心にとどまって欲しいのです。そしてそれは声になることを私たちががんばって実現するというものではありません。私たちのうちに聖霊が与えられているのですから、その聖霊に満たされ委ねていくとき、聖霊の思いが、私という存在から溢れ出てくださるのです。私は声です。イエス様を証しする声です。